

藝大の 歩き方

—上野の杜のキャンパスガイド—

第7回★正木記念館

歴史ゆかしい「上野」という場所に校地を構え、明治以来の伝統を誇る藝大の隠れた「名所」を毎回テーマを変えて紹介する。



美術学校五代目校長を記念する

横溝廣子

上野公園から藝大に向かって歩くと最初の角にあり、見上げると鬼瓦が屋根を飾る建物が「正木記念館」である。正木直彦（一八六二年—一九四〇年）は、一九〇一（明治三十五年）年～一九三二（昭和七）年までの三十二年間東京美術学校五代目の校長を務め、帝国美術院院長、各博覧会審査官等を歴任した人物である。正木記念館はその長年にわたる功労を記念するために、陳列館と隣接する東側の林の中に建設され、一九三五（昭和十）年八月に竣工した。

本人の意思を尊重して純書院造の和室をもつ耐震耐火の鉄筋コンクリート造とし、その和室には一九〇一（明治三十四）年に増築された渋沢栄一の滝野川の別荘書院のために制作された橋本雅邦（一八九〇年～一九八八年）日本画教授の襖絵と国華俱樂部から寄贈された高村光雲（一八九〇年～一九一五年）彫刻科教授の作の透彫の欄間を入れて、金沢庸治（一九三六年～四四年）建築科助教授が設計に当たった。現在、襖絵は美術館収蔵品として収蔵庫内で保管しているが、今年十月に開催され

る藝大茶会の際には正木記念館の二階を再び飾る予定である。襖の引き手は香取秀真（一九三三年～四三年）金工史教授の作、欄間の縁などの漆塗りは六角紫水（一九二四年～四四年）漆工科教授の作、電気器具は津田信夫（一九二一年～四四年）鑄金科教授のデザイン、鬼瓦の下にある六葉金具は内藤春治（一九四四年～六四年）鑄金科教授の作である。現存しないが、当時は入口の上には山崎覚太郎（一九四三年～四四年）漆工科教授の作の電気時計があった。そして伝聞によれば鬼瓦は北村西望（一九一八年～四四年）彫刻科教授の作であるという。

一階にはガラスの展示ケースに立体作品を展示し、二階の和室には日本画を展示した。和室の展示室は、今日では大変珍しいものとなっている。また、正木直彦像が記念館と陳列館の間の中庭に置かれているが、これは沼田一雅（一九〇七年～三九年）鑄金科教授が正木のために制作した当時わが国最大の等身大の陶像である。
（よこみぞ・ひろこ）大学美術館准教授



沼田一雅作「正木直彦像」





1階展示室



2階和室